

むかしの話だ。

烏山の那須家と常陸の佐竹家は、たびたび戦いをくり返していてな、その中でも下境の大崖山たいがいさんの戦いと烏山河原の戦いは、最も激しかったと。

烏山河原の戦いでは、烏山城主那須資晴なすけはるも佐竹の兵に囲まれてしまった。

「もはや、これまでか」

と、思ったところを、あとから駆けつけた家来に無事、助けられたそうなの。

それから烏山勢は必死に戦って、佐竹勢を追い込んでいったと。遠くの常陸の国から押し寄せた佐竹勢は、退散たいさんしようと試みこころたが、一気に退くしりぞのは困難な事だった。

困った佐竹勢は、

「あとから追い討ちをかけられてはまずい、なんとかせねば」

と、しこで考えた。峠のてっぺんにたどり着くと、わざとたくさんみちばたのわらじを道端みちばたにぬ

ぎ捨てたり、そこらの木々にぶら下げたりしたんだと。

さも、大軍が立ち去ったかの様に見せかける為だ。

やがて、峠まで追いかけて来た烏山勢は、辺り一面に広がるわらじを見て、

「これ程ほどのわらじを履はきかえるは、まさに大軍なり、へたに追い討ちは出来ぬな」

そう言って、早々そうそうに引き返して行ったと。

軍勢が立ち去ったあとには、千足もあろうわらじと、傍らかたわの木々が静かに風にゆれておった。

それからというもの、この峠を千足峠と言う様になったという事じゃ。

おしまい